

は、もうくたくたで、泣けてきました。亡姉に「ありがとう」とお礼を言っていました。

その途端、空砲が鳴りソ連兵のやってくるのが見えました。見張り兵に発見されたのです。皆、その場に座り込んでしまいました。

主人がソ連兵と何か話していました。私の娘の頭をなで「可愛いね」と言つて、返つて行つたとのことです。

川の浅瀬を見つげ、やっと向こう岸にたどりつきました。ふと、後ろを振り返ると、山の中腹に大きな穴が三つ空いていて、大砲のようなものが見えます。「危ない」からと夜まで草むらに隠れていました。

暗闇（やみ）になり、小さな村に着き、一晩泊めてもらいました。皆さん親切な人でした。私は所持金全

てを出し「翌朝、五時半に出発しますので、子どもたちにおにぎりを作つてやって下さい」と頼んで横になりました。明朝六時に村の入口で皆と出会うことになっていました。

疲れていた私は、すぐにうつらうつらし始めました。そこへ、五歳の時に別れたきりの姉が現れたのです。

私は「疲れました。もうここまでくれば安心だから、連れて行つて下さい」と手を差し出しました。

しかし、姉は何も言わず首を振つて「行きなさい」というように追いつ返します。「お姉さん、連れて行って」と大声で叫びましたが、「お帰りなさい」というふうには手を振って、姿が消えました。

主人に揺り起こされ、私は目を覚ましました。「うなされていたよ」

「姉さんに会ったけど、連れて行つてくれなかったわ」「守つてくれているのだよ」と言われました。

朝になると、おにぎりと、おかずまでたくさん作つてくれ「奥さん、元気で行きなさいね」と泣きながら励ましてくれました。私は、お礼の言葉も出ませんでした。

韓国に入ると昼中も歩けます。石を投げられることもありません。

歩きながら、川面を見ると何か浮かんでいきます。主人に引き上げてもらうと、四歳くらいのおぼろしい女の子でした。川岸に深く穴を掘り、葬つてきました。

また、歩き出すと、ポプラの木の下に八十歳くらいのおばあさんが、座り込み、うつむいていました。主人が「どうしたのですか」と尋ねると「孫にここまで連れて来てもらい